

宇部市大字奥万倉ニッ道祖

岩戸神楽舞

～復活にむけて～

うべの里アートフェスタ 2019
フィナーレ

令和元年

12月7日(土)

18:00～20:00(17:00開場)

【場 所】

万倉ふれあいセンター
(多目的ホール)

※入場無料

※当日は『岩戸神楽舞弁当』の販売もあります！

万倉ふれあいセンター受付にて
17時～ (なくなり次第終了)

1個 1,000円(税別)

■主催 岩戸神楽舞復興委員会

■後援 宇部市

■協力

【舞・楽指導】ミュージカル山陽ありすの家

【衣装・キャラクターデザイン】宇部フロンティア大学付属香川高等学校生活デザイン科／

【面】(旬)モデラ、デコクレイクラフト作家 小林安子／ 【和紙】小野観光推進協議会文化伝承部会／

【彫り物】切絵アートクリエイター 中村敦巨／ 【旗・赤間インク】mike to tama 代表 田中杏侑／

【岩戸神楽舞弁当】里山キッチン 霜降山カフェ

うべの里
アートフェスタ
Art Festa in Village of Ube

岩戸神楽舞

■復活への想い

ここふるさと万倉地域で、伝統ある山口県指定無形民俗文化財である「岩戸神楽舞」の継承が、2008 年を最後に途絶え、私自身、忸怩（じくじ）たる思いを抱いていました。しかしながら、この度の復興事業で、万倉校区内外から多くの御支援をいただき、たくさんの御縁を結ぶことができましたことに心から感謝しています。この復興事業は、万倉地域の次世代を担う人材の育成にも大きく寄与することとなり、さらには校区外の方々との相互協力体制が構築できるなど、地域に及ぼす効果は、とても大きいと確信しています。これからも是非、多くの方々に万倉地域の「岩戸神楽舞」に興味を持っていただきたいと思います。また、次世代への文化遺産の継承と、文化遺産を核とした地域活性化を目指して活動している“小さな地域の大きな挑戦”に対して、さらなる継続的なご支援をいただきますようよろしくお願い致します。

舞の次第は、太鼓・笛・摺鉦の五調子に合せて神楽舞の一番、二番、三番、三宝の舞、榊の舞、剣の舞と続き、祝詞の舞では奉納の祝詞を奏上します。以上各座の舞はいずれも採物の舞で、神のもつ採物によって悪魔切祓いの所作を中心とするものです。その間の神楽舞の二番には天邪鬼（随神）の滑稽が加わり、神楽舞と三宝の舞には掛け歌が伴います。三宝の舞と榊の舞の間には、独特の天蓋操作があり、神降臨の神態を模出しています。ついで、岩戸の舞、姫の舞、鬼の舞の三座はそれぞれ天岩戸の神話を仕組んだ舞で、この神楽が岩戸神楽舞といわれるゆえんをなしています。

最後に弓の舞では、四方八方への特殊な祓納めの呪術を帯びる弓の所作が行われ舞い納められます。この神楽舞が神への奉納舞である事で、神を拝して始め、神を拝して終わることは、基本法則です。

■順番（十種十三座）

種	座（演目）	別命	人員	衣装	面	採物	備考
1	神楽の舞 1 番		1 人	烏帽子直衣	—	鈴、扇	歌
	“ 2 番	天邪鬼	2 人	“	1 人	“	歌、天邪鬼は反逆者
	“ 3 番		1 人	“	—	“	
2	三宝の舞		2 人	“	—	鈴、三宝各 2	
	天蓋操作		1 人	“	—	天蓋	八方に操作する
3	鉦の舞		1 人	“	—	鉦	
4	榊の舞	柴	2 人	“	—	榊各 1	
5	剣の舞	將軍	2 人	“	—	剣各 1	
6	祝詞の舞		1 人	烏帽子直衣綿半衣	有	大幣、鈴	祝詞奏上、舞の由来と祈願
7	岩戸の舞	岩戸さぐり	1 人	“	有	小幣、杖松明	岩戸の所在探査
8	姫の舞	姫宮天宇受女	1 人	“、紫袴	有	榊、天蓋	大神招き出しの急調舞
9	鬼の舞	手力男	1 人	無直垂鎧	有	“	
10	弓の舞		2 人	烏帽子直垂、裾紋	—	弓剣各 1	



岩戸神楽舞復興委員会
会長 矢原久登





い わ と か ぐ ら ま い 岩戸神楽舞

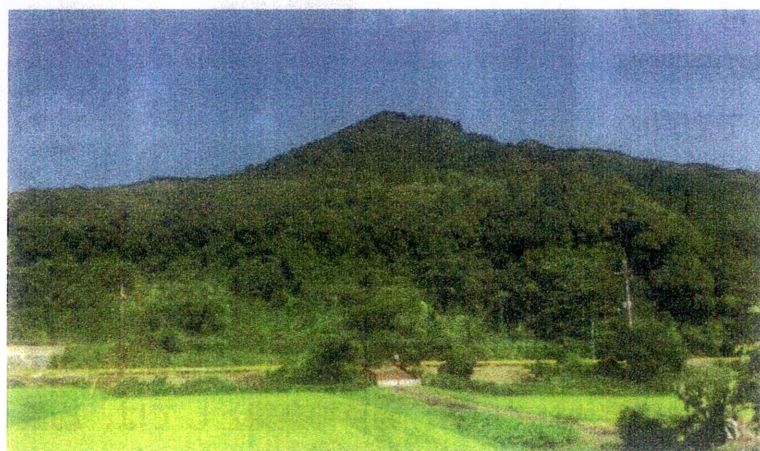


～宇部市奥万倉ニッ道祖（ふたつさや）自治会～

由来

ニッ道祖（ふたつさや）とは2つの道祖神が鎮座することに由来する自治会名である。

この地は神話伝説に富み、敬神の念が厚い。殊に自治会の一隅にそびえる海拔300mの御伊勢山に奉祀する皇太神宮（天文14年奉祀）に対する尊崇は古来極めて厚く、その発露が奉納行事としての岩戸神楽舞の創始となったものである。およそ200年前、長谷川庄兵衛なるものが当



▲御伊勢山風景

時の河本宮司家（河本現宮司の先祖）から伊勢式岩戸神楽舞の伝授を受け、これを基本として同じ伊勢式別流の長所も取り入れ、奉納舞として創始したのがこの五調子岩戸神楽舞という。当初は長谷川家をはじめ、大谷、古川、荒川、矢原、木村等（何れも現自治会同姓者の先祖）で連中をつくり、舞楽を分担し、一家相伝の特技として奉納していた。

明治末期頃から自治会行事となり、一般若連中により毎年の奉納が行われた。満州事变後一時中絶したが、昭和31年幸いにして中絶当時の舞楽担当者が健在であったので、衣装用具等の一部を補充し、五調子岩戸神楽舞を完全に復興し、昭和33年4月山口県無形民俗文化財に指定された。

岩戸神楽舞は神話天岩戸の場面を象徴表現するものである。御伊勢山皇太神宮に奉納するわけは、神威をおろがみ謝すると共に、上御武運長久、家運繁栄、五穀成就、馬安全を祈り、その旨を祝詞奏上する。

楽は太鼓、笛、摺り鉦の五調子でこの舞を正式に舞い納めるためにはおよそ4時間を要する。

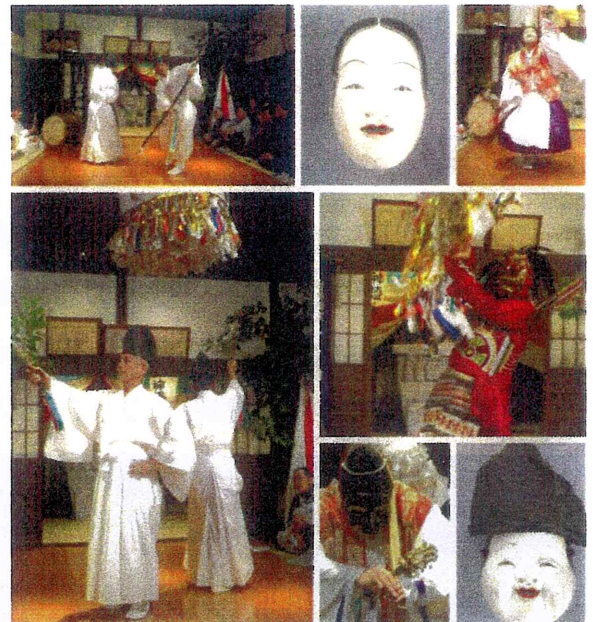


概要

この神楽舞は下記（舞の順序表）の舞（十種十二座）に天蓋操作が加わり、これを太鼓・笛・摺り鉦の五調子囃子に合わせて演出する。毎年12月5日の夜、御伊勢山皇大神宮遙拝所に神座を設け、神燈を掲げ幕を張り、右正面には玉と鏡を掛け紅白の布帛を垂らした大櫛を立てて、その前で舞う。舞場の天井からは天蓋をつるす。舞の次第は、太鼓・笛・摺り鉦の五調子囃子に合わせて神楽舞の一番、二番、三番、三宝の舞、櫛の舞、鉦の舞、剣の舞とつづき、祝詞の舞では奉納の祝詞を奏上する。以上各座の舞はいずれも採物の舞で、神のもつ採物によって悪魔切祓いの所作を中心とするものである。その間の神楽舞の二番には、天邪鬼（随神）の滑稽が加わり、神楽舞と三宝の舞には、掛け歌が伴う。三宝の舞と櫛の舞の間には、独特の天蓋操作があって、神降臨の神態を模出する。ついで岩戸の舞、姫の舞、鬼の舞の三座はそれぞれ天の岩戸の神話を仕組んだ舞で、この神楽がいわゆる岩戸神楽舞といわれるゆえんをなしている。最後に弓の舞の座では、四方八方への特殊な祓納めの呪術を帯びる弓の所作が行われ舞い納められる。この神楽舞が神への奉納舞であることで、神を拝して始め、神を拝して終わることは、基本法則である。舞者は原則として、1m四方の範囲内で舞うことに限定されている。岩戸神楽舞としては、紛装が質朴で採物舞の多いことが特徴とされている。



▲天蓋操作



《舞の順序》

	種目	別命	人員	衣装	面	採物	備考
1	神楽の舞1番		1人	烏帽子直衣	—	鈴、扇	歌
	〃 2番	天邪鬼	2人	〃	1人	〃	歌、天邪鬼は反逆者
	〃 3番		1人	〃	—	〃	
2	三宝の舞		2人	〃	—	鈴、三宝各2	
	天蓋操作		1人	〃	—	天蓋	八方に操作する
3	鉦の舞		1人	〃	—	鉦	
4	櫛の舞	柴	2人	〃	—	櫛各1	
5	剣の舞	將軍	2人	〃	—	剣各1	
6	祝詞の舞		1人	烏帽子直衣綿半衣	有	大幣、鈴	祝詞奏上、舞の由来と祈願
7	岩戸の舞	岩戸さぐり	1人	〃	有	小幣、杖明松	岩戸の所在探査
8	姫の舞	姫宮天宇受女	1人	〃、紫袴	有	櫛、天蓋	大神招き出しの急調舞
9	鬼の舞	手力男	1人	無直垂鎧	有	〃	
10	弓の舞		2人	烏帽子直垂、裾紋	—	弓剣各1	